日本キリスト改革派 芦屋教会 月報	2025 年 4 月号 (No.446)

巻頭言 「世界が見えるままのものであるなら」

宇野 元

よく「存在」のふしぎさを思います。なにも大げさなことではありません。ふだんの生活のなかで。子どもが芦屋に来る。そしてまた東京に帰る。来ると、あたりまえのように「存在」する。おしゃべりする。二階から下りてきて台所で冷蔵庫をあけているのが仕事部屋から見える。行ってきます、と言って外へ出る。その瞬間に存在が消える。またね、と言って駅の改札で別れると、いましがたまでがまるで夢のよう。まるで劇のように思われます。書き割りのむこうに隠れているんじゃないか、と思います。舞台裏をのぞいてみたくなります。

ふと、今ここにいる私じしんが、そのような存在であると感じます。そして今ある見える世界がそのようなものであると。

今の私も、今の世界も過ぎ去ってゆきます。

身近に存在した人たち。その人を囲んでいた物たちは変わらずに、その人だけがいない。

書き割りの向こうはどうなっているのだろう？

謎の多い女性、牧師エイムズの妻、ライラについて記しておきましょう。彼女の秘められた過去が、ギレアド・シリーズ第三作『Lila』の中で解き明かされています。

ライラには、忘れられない人たちがいました。ドンと呼ばれる人をかしらとする一団。家族のように暮らした。とりわけ、ドールという優しい母のようだった存在が、彼女の心から離れません。あの人たちはどこにいるだろう？　あるいは、どこにいったのだろう？　1920 年代のアメリカ中西部。その日の糧を懸命に得て、分かち合った。しかし大恐慌のなか、彼らはばらばらになります。少女ライラは、ドールと共に住む場所を転々とします。ドールはナイフを携帯していました。なにかの諍いに巻き込まれているらしい。ある日、ドールは瀕死の重症を負い、やがて姿を消します……。ライラは長く孤独で困難な年月を体験したのち、田舎町ギレアドで老牧師エイムズと出会い、むすばれました。

――もしイエス様がいないなら、物事はぼくらが見ているとおりのものでしかないだろう、と、エイムズが言います。しかし復活を信じるなら、世界が見えるままのものであると考えることのほうが難しい。「物事は見ているとおりであると考えるのは正しくないとぼくは思うよ。」